

聞き取り調査

俺のシベリア

栃木県 前澤 韶

これまでシベリア抑留記は多くの方が色々な角度から書き尽くされ語り尽くされ今に至っている。今さら書く事もないはずが、戦友、同郷の野沢芳夫、黒川護両氏の勧めを受け、重い筆を持つ事になった。

平成十五（二〇〇三）年七月、全抑協主催の抑留展が小山市で開かれた。当事者の一人でもあるので手伝いに行き、様々な展示品に出会い、往時がしのばれ、収容所でのつらさ、せつなさが逆流する思いだった。

特に目についたのは手編みの靴下だった。スプレーや将棋駒を作るのは目にしたが、これは全く初めての事、注にソ連側関係工場の作業に行った際袋を持ち帰り、その糸で編んだとあった。

窮すれば通ずと言うが、その発想と努力には驚いた。

「昨日十目とおめけふまた十目靴下編む 戦友は時折とも雑談はなしに笑みぬ」

それにしてもシベリアの寒さは格別だった。ダイヤモンドダストという言葉は復員後知ったが、晴天の日キラキラ粉雪が舞うように見えた時は怪しい気持ちになったものだ。馬並の皮付きの高梁をしばらく食わされた時期当然排泄物はその皮だからそれが凍って小倉アイスに見えたのは飢えて

たせいなのか。

白樺の葉がハラハラ散って雁が南の空へ飛び去るのを見ると、今年も駄目かと望郷の念に駆られた。

「冬近し雁行く空を見据えたつラーゲリの柵は無常に高し」

故吉田正さんの「異国の丘」は今でも涙で歌にならない。

昭和二十四（一九四九）年八月末、明優丸で舞鶴入港、DDTを頭からぶっかけられ品物同様の扱いに腹が立ったが、日本へ帰った喜びで帳消しとした。

わずかな物と、額は忘れたが、金を貰って家路についた。車中、大学生が何かと世話してくれたが、わずかな事で怒鳴った記憶がある。臍をかむ思いが今でもよぎる。あれから五十有余年、シベリアは遠のいたけれど決して忘れ去る事はないだろう。

「痛恨の根雪ゆるめるシベリアに今スズランの

清らにさくか」

平成十六年一月四日、俺は八十歳の大台に乗った。いつまで生かされるか、分らないが、実りある青春だったと思う。原隊、石頭、抑留、どれを取っても一途に生きたし、得がたい勉強だったと思う、これは決してそら言ではない。

終わりに

「身捨つるを誉と生きし二十歳の丹も褪せて霜おく草もみじ」

軍歴

昭和十九年十一月二日 東部三十六部隊入営

〃 十二月四日 陣第二九九三部隊配属

初年兵教育 幹候 甲

幹

昭和二十年六月十六日 陣師団関東軍隷下

七月 石頭予備士官学校入校

以下略